

秋色の尾瀬

新田由紀子

湿原の草紅葉が見頃を過ぎる頃、尾瀬の山小屋は小屋閉めを迎える。首都圏からの直通バスやシャトルバスも運行を終えて、玄関口の村はスキー客を迎えるまで少しの間ひつそりとなる。毎年その間際に尾瀬に足を運ぶようになった。

『水芭蕉の花が 夢見て咲いている』と、唄われるのは夏の尾瀬のこと。湿原の木道はハイカーまがいの観光客で大渋滞、山小屋は相部屋で詰め込まれる。でも、季節を外せば静寂な大自然をゆっくり堪能できるのだ。膝を痛めてからは高い山に登れなくなつて、それでも習慣のようにリュックを詰め登山靴を履いて出かける先として、秋の尾瀬がある。

尾瀬ヶ原は群馬、福島、新潟の三県にまたがる高層湿原で標高千四百㍍の高山帯にある。周りを燧ヶ岳、至仏山、景鶴山など二千㍍級の山々が囲む。福島県側にある燧ヶ岳は鋭角的な山容をしていて、東北一の高さを誇る。広大な尾瀬ヶ原を挟んで、群馬側のもつゝひととした至仏山と向かい合った景観には自然美の妙を感じてやまない。両山共に日本百名山で、ハイカーが目指す憧れの頂だ。北の縁の景鶴山は三百名山の一つとはいえ、登山道もなく奥まつて、そぞろ分け入ってみたい気になる。山小屋のベンチでワインなど飲みながら、湿原の果てに秋の日に影をまとめた山の姿眺めるのは至福のひとときだ。

尾瀬への入山口はいくつかあって、目的や体力に合わせて選べる。関東圏からは大清水口と鳩待峠が便利だ。家を出て四時間もあれば、清々しい大自然の真っ只中に立てる。鳩待峠は観光ツアーや登山者向けのルートで、木道を一時間下つて湿原の西端、山の鼻に出ると、ビジターセンターと山小屋があるベースだ。一方、大清水口からの道は経験者向きといえる。尾瀬沼の小屋主三代目平野長靖さんが大雪で遭難死した話は『尾瀬・山小屋三代の記』に詳しい。福島県側からのルートでは沼山峠口や、裏尾瀬の展望の良い燧裏林道と、どこのをどう歩こうか心躍る悩みが尽きない。